久保田秀夫* サクラノート（一）

H. KUBOTA : Notes on Japanese Cherries

1） **オグラヤマザクラ** 日光の小倉山国有林に続く雑木林にはサクラの種類が多く，海抜650mぐらいのところにオオヤマザクラ，ヤマザクラ，カスミザクラ，チョウジザクラをはじめこれらの間に生じたと思はれる雑種の個体も多く見られる。

ここに記すオグラヤマザクラは日光の植木方平氏が鳴沢岸に自生するのを発見されたもので，チチブザクラ(エドヒガン×チョウジザクラ)の系統に入るものと考えられる。花は葉前性，樹皮は縦裂する傾向があり，散形花序に3－4個の花がつき，花は径1.7－2.5cm,淡紅色，がく筒は筒状で8mmぐらい，下部はふくらみ，有毛，小花柄は10－14mm，開出する密毛があり，花柱は下部に開出する毛がある。葉は倒披針形あるいは挾長だ円形，基部はくさび形，先は尾状に鋭く光り，側脈は11－14対あり，裏面の中助，側脈には伏毛が多い。柄は開出する密毛があり，密腺は柄の先端にときには葉の基部に近く縁につくが，エドヒガンのそれよりは小さい。花序のりん片や苞片の形質はエドヒガンに似ているが，花時に苞片は脱落しない。果実は黒熟し，甘味がある。花つきがよく，花時には大変美しい。

以上記した如く，がく筒が細長いこと，密腺が柄の先端につくこと，葉が挾長で尾状に

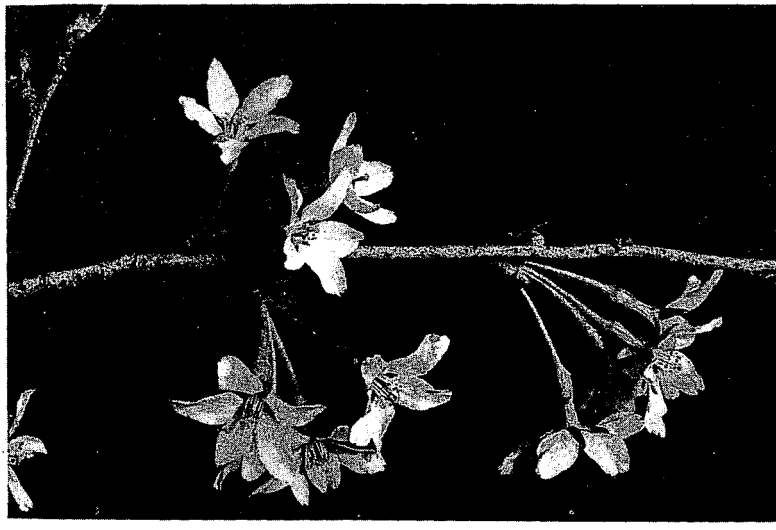

Fig. 1　オグラヤマザクラ　*Prunus* × *chichibuensis* var. *uyekii*

* 東京大学理学部付属植物園日光分園　Nikko Branch Garden of Botanical Gardens, Faculty of Science, University of Tokyo

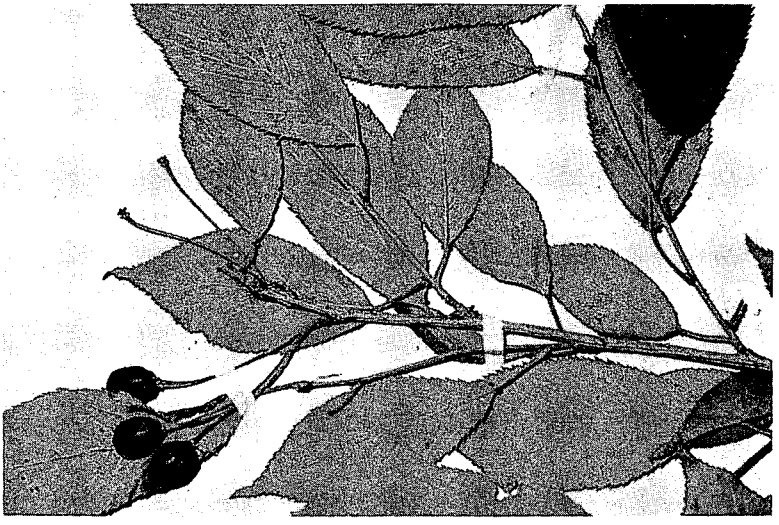

Fig. 2 オグラヤマザクラ *Prunus* × *chichibuensis* var. *uyekii*

鋭く尖ることなどはチチブザクラからずれ，どちらかといえばエドヒガンに近く，全体的にはこのサクラはチチブザクラのエドヒガンに近い形質と思われるので，チチブザクラの変種とし，和名をオグラヤマザクラとよぶことにし，学名はこのサクラの自生地の雑木林の所有者であり，発見者でもあり，この地域のサクラの保護につとめておられる前記の植木氏に献名することにした。

（1） **Prnus** × **chichibuensis** KUBOTA et MORIYA in Bull. Chi. Mus. Nat. His. 10 : 117,1960

var. **uyekii** KUBOTA, var. nov.

Arbor. Flores praecoci 2-4 vulgo 3 umbellati. Pedunculi 0-5 mm pilosi. Pedicelli 10-14mm longi dense patente pilosi. Calycis tubus tubulatus 7-8 mm longus basi inflatus ruber extus pubescens. Petala late ellptica 8-12mm longa 4-7mm lata apice emarginata lilacina. Stylus 9mm longus infra medium pilosus. Lamina folii adulti anguste oblonga vel oblongo-oblanceolata 10.5-27mm longa 10-30mm lata apice caudato-acuminata basi cuneata utrinque 12-14 venosa supra pilosa infra valde pilosa margine duplicato-serrulata. Petioli 10-13 mm longi valde pilosi apice petioli vel basi laminae 2 glandulis instructi. Pedunculi fructiferi 2-5mm longi. Pedicelli fructiferi 22-28mm longi patente pilosi. Drupa nigra dulcis.

Nom. Jap. Ogurayama-zakura, nom. nov.

Hab. Honshu : Ogurayama Nikko, Prov. Shimotsuke (H.UYEKI, April 22,

1967-typus florum in Herb. Tl. ; Jun. 16, 1967- typus fructuum in Tl.)

2） **ヤツガタケザクラ** 八ヶ岳山脈の南部の東南から南西にかけておおよそ 1200 m から 1700 m 付近にはマメザクラが多く，またこの地域から上方にはタカネザクラが多い。ことにこの両種が混生する1400mから1500m付近には両種の中間型をもつものからどちらか一方に近い形質をもつサクラがあって複雑である。また下方にはカスミザクラの形質が入ったフジカスミザクラ* （*Prunus Yuyamae* SUGIMOTO）の系統のものも所々に自生する。マメザクラとタカネザクラの中間形のものは両種の間に生じた自然雑種と考えられるのでヤツガタケザクラの和名を付して報告することにした。八ヶ岳山麓方面のサクラについての詳細は長野県植物研究会誌 VOL, 10,1977 を参照されたい。

枝は太く，多数分枝し，樹皮は暗紅紫色で光沢がある。花は葉季性，がく筒は紅色，6.5mm，筒状鐘形でタカネザクラに似る。葉は広だ円形あるいは広倒卵形，基部は鈍一広楔脚，縁は欠刻状重鋸歯をなし，鋸歯の先は尖り，腺は不明瞭。葉柄は毛があり，蜜腺は柄の先端か葉脚にある。果実は黒熟し，酸味がある。枝は太く，樹皮は光沢があり，花は葉と共に出る点はタカネザクラに近く，がく筒は両者の中間形かタカネザクラに近く，葉は両者の中間の大きさであるが，蜜腺の位置はタカネザクラに似る。

ヤツガタケザクラは八ヶ岳の山麓に近い美濃戸高原，広原，八ヶ岳横断道路の上部山地等に点生するが，最近は分譲地としての開発がはげしくサクラも盛んに伐採されつつあるのは残念である。

学名はこの方面の数回の調査にいつも同行され，案内その他協力を惜しまれなかった諏

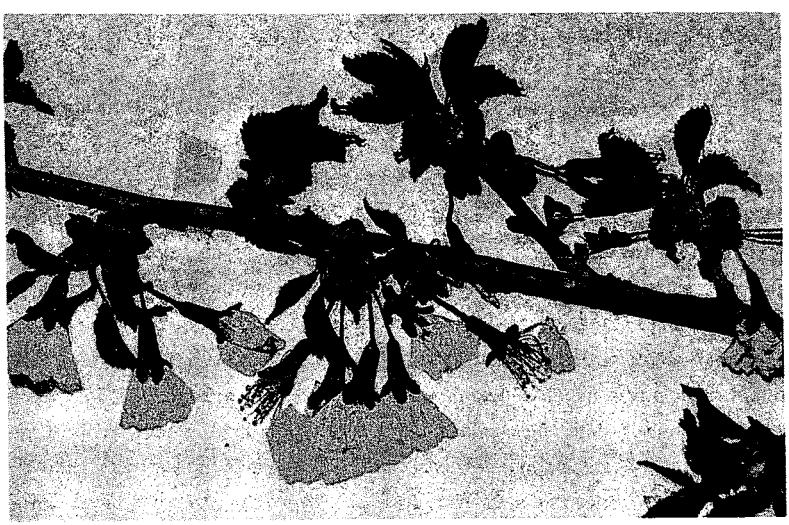

Fig. 3　ヤツガタケザクラ　*Prunus miyasakana*

* *Prums yuyamae* SUGIMOTO, New Keys Woody Pl. Jap. 216 (1972)

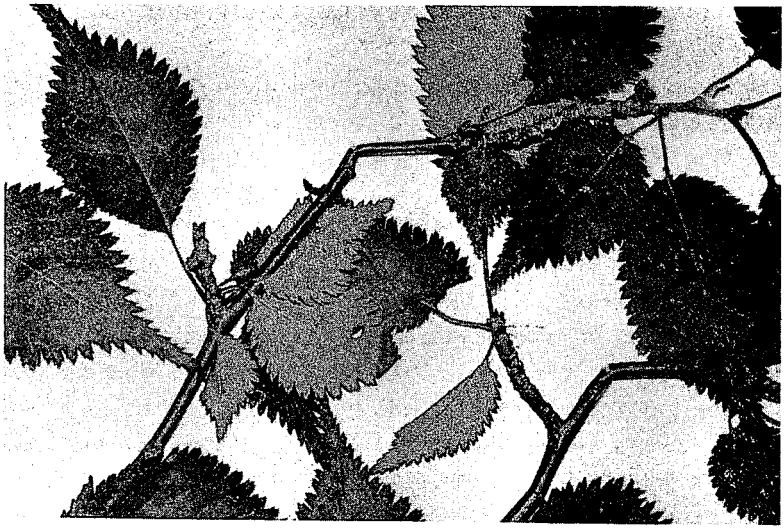

Fig. 4 ヤツガタケザクラ *Prunus miyasakana*

訪市役所に勤務される宮坂誠文氏に献名したものである。

(2) **Prunus miyasakana** KUBOTA, hybr. nov. (*P. incisa* × *P. nipponica*) in Bull. Bot. Soc. Nagano 10,127 (1977) nom. nov.

Arbuscula. Ramuli rubro-purpurei glabri lucidi. Folia juvenilia rubro-purpurea supra pilosa infra secus venas pilosa, petiolis paullo pilosis. Squamae gemmarum floriferarum late obovatae 6-5mm longae 4-2.5m latae rubro-castaneae. Flores subcoetanei 2-3 umbellati. Bracteae obovatae 4mm longae 2.5 mm latae. Pedicelli 10-12mm longi patente pilosi rubro-viridescentes. Calycis tubus longe campanulatus ca. 6.5mm longus atropurpureo-rubrus paullo pillosellus lobi late ovati ca. 2.5mm longi apice obtusi vel acuti margine paullo serrulati. Petala late ovata vel late elliptica ca. 8.5-9mm longa 6.3mm lata lilacino-alba vel alba apice paullo emarginata. Stylus ca. 1.4mm longus glaber. Lamina folii adulti late elliptica vel late obovata 25-60mm longa 18-35mm lata apice subito caudato-acuminata basi vulgo paullo rotundata interdum obtusa margine inciso-duplicato-serrulata in apice serruli eglandulis. supra sparsim pilosa secus venos pilosa. Petioli ca. 10-13mm longi pilosi vulgo apice petioli interdum basi laminae 2 glandulis instructi. Pedicelli fructiferi 15-18mm longi. Drupa nigra astringens.

Nom. Jap. Yatsugatake-zakura, nom. nov.

Hab. Honshu : Minodo in montes Yatsugatake, prov. Shinano (H. KUBOTA,

May 9, 1974-typus florum in Herb. Tl. ; Jun. 24, 1974-typus fructuum in Tl.

3） イシヅチザクラ（シコクマメザクラ）

四国の石鎚山系や赤石山系のほぼ1500mから上方の山頂にかけて主として岩場やがれ場付近には守屋忠氏が関東のマメザクラの変種とされたシコクマメザクラが自生する。このサクラは今から42.3年前よりチシマザクラに同定されてきたものであるが，最近守屋氏はマメザクラが石鎚山の亜高山帯の環境下にあってその基本型から変化した四国型であるとの見解の下にマメザクラの変種とされたものである。私も数回現地に行きこのサクラを観察したが，石鎚山系や赤石山系の上部は本州の亜高山帯の植生に似ており，共通種も少くなく，石鎚山のサクラの垂直分布についてみるとエドヒガンはおおよそ800m以下に，ヤマザクラやカスミザクラが1200m以下に，オオヤマザクラが1400m以下に自生し，1600m付近から上部山頂にかけてシコクマメザクラが多く自生する。これが自生するところにはダケカンバ，シラベ（シコクシラベ）ウラジロモミ，コメツガ，ナンゴクミネカエデ，ナナカマド，ムシカリ，ハクサンシャクナゲ，コメツツジなどが自生し，本州中部においてタカネザクラが出現する亜高山帯の海抜や植生と類似しており，シコクマメザクラはタカネザクラと対比されるべきものと考えられる。

高さ1.5－4mの低木から亜高木,樹皮は黒褐色から暗紅紫色,光沢があり，小枝は太く，タカネザクラのような樹型をなす。花は葉季性，散形花序に2－3花をつける。小花柄は12－22mm，通常有毛，がく筒状鐘形，長さ6－10mm，微毛あるいはほとんど無毛，基部はややふくらむものが多い。花は淡紅色あるいは白色，花弁は倒卵形，長さ11－13mm，巾7－9mm，花柱は9.5－14mm，下部しばしば散毛をつける。成葉は広倒卵形，先は

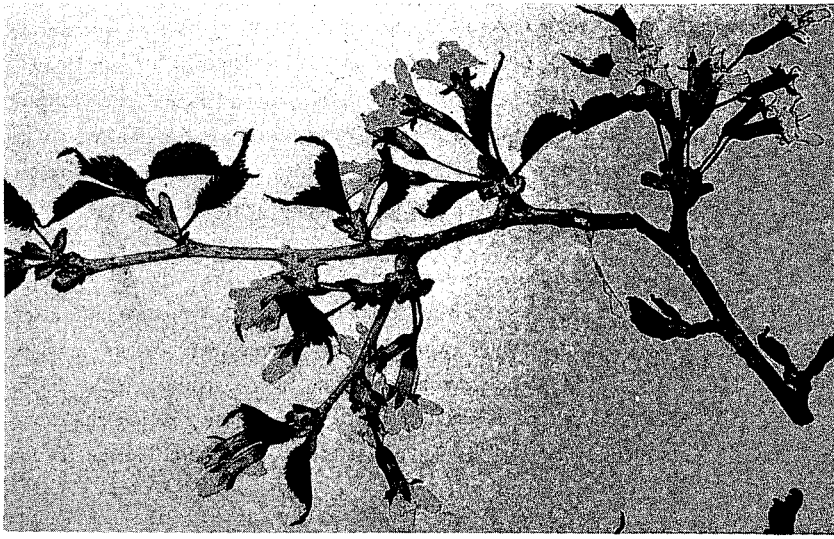

Fig. 5　イシヅチザクラ　*Prunus shikokuensis*

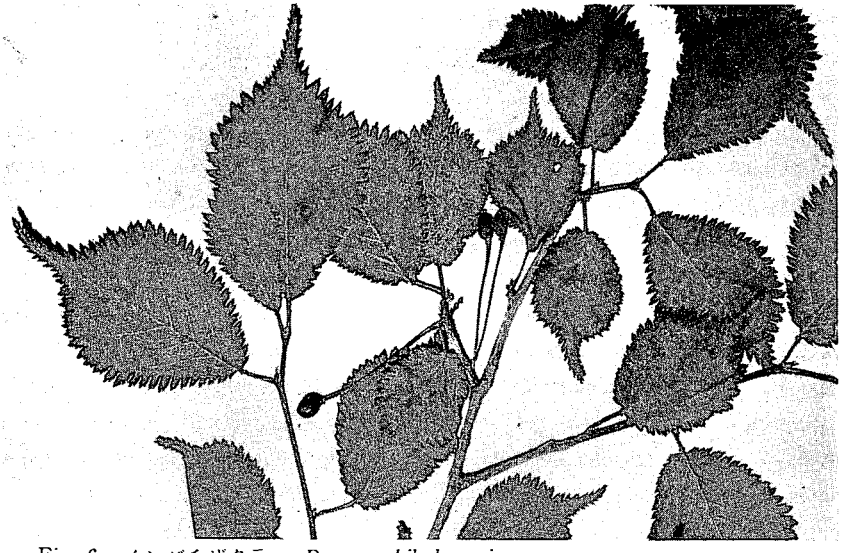

Fig: 6 イシヅチザクラ *Prunus shikokuensis*

急に尾状鋭尖，長さ30－68mm，巾17－40mm，欠刻状重鋸歯縁，鋸歯の先の腺は不明，表裏ともに有毛，裏面はとくに中助，脈上に伏毛があり，柄は6－12mm，伏毛と開出毛があり，蜜腺は柄の上部にありマメザクラの如く葉脚にはつかない。果柄は26－33mm，花後に伸長する。果実は黒熟し，酸味がある。

以上記した中で生育環境，樹型，樹皮の色と光沢，蜜腺の位置，果実の味等はタカネザクラに近ずき，がく筒が太く，長い点はキンキマメザクラとタカネザクラの中間形を示すが，長い点はキンキマメに近かずき，基部がふくらむ個体はマメザクラにも近ずく。成葉の鋸歯の先の腺は不明であるが，幼時は明らかであり，石鎚山，東赤石山産の株から採取した種子の実生苗の葉は大形でタカネザクラと区別が困難であるなどの点からこのサクラはタカネザクラとマメザクラ系（キンキマメザクラ）との雑種とする方が妥当であると思はれる。現在四国にはタカネザクラとキンキマメザクラの両種が生じていないところから最後の氷期の寒冷の気候の頃，北方から南下した寒帯の植物が西日本に分布した時に共に分布したタカネザクラが西日本に自生していたキンキマメザクラと交雑して四国の高山に分布し，気候の回復後も両種の混交した形で他の高山性の植物と共に遺存したのがこのサクラであると考察される。したがってマメザクラの変種としたシコクマメザクラはイシズチザクラと改めることを提唱すると共に，学名を組合わせをすることにした。

この調査では種々ご指導をいただいた大井次三郎先に心からおん礼申しあげる。また京都大学の標本の閲覧を許された村田源先生，ご教示をいただいた八木繁一，山本四郎両先生にもあつくおん礼申しあげる。

（3） Prunus × shikokuensis （MORIYA）KUBOTA, comb. nov. —— *P. incisa*

THUNB. var. *shikokuensis* MORIYA in Journ. Geobot. 17 : 37,1969 ; in OHWI et OHTA, Flowering Cher. Jap. 302 (1973), comb. nud.

Nom. Jap. Ishizuchi-zakura, nom. nov.

Recently this chis cherry which grows on the upper regions of Mts. Ishizuchi and Mts. Akaishi was described by Mr. MORIYA as a new variety of *Prunus incisa* THUNB. This cherry as Mr. MORIYA described has been known for a long time as *P. nipponica* var. *kurilensis* — Chishima-zakura. Based on obser-vation about various individuals of this cherry in habitat and about seedlings which germinated from seeds at our garden, it is considered that this does not belong to P. incisa but to a hybrid between P. incisa var. kinkiensis and P. nipponica. Especially its shape and habitat are resemble these of P. nipponica and also a little long and thickish tube and glands on petiole near base of leaves, glandular serration on juvenile leaves, and sourish fruits indicate the charachteristics related to p. nipponica.